

「なそふ」考

小 野 寛

一

大伴宿禰家持贈三坂上家之大嬢一歌一首

吾屋外爾わがやとに 蒔之瞿麦まきしなでしこ 何時毛いつしも 花爾咲奈武はなにしなむ 名蘇経乍見武なそへつみむ (卷八・一四四八)

右の歌は題詞によれば、大伴家持の坂上大嬢へ贈った歌である。作歌年時の記載はないが、卷八における歌の排列によって、私はこの歌を家持の青春第一作であると推定し、天平四年春の作と考えている。^(注1)家持にとって記念すべき歌の一つであろうと思う。この歌が卷八「春相聞」の部の冒頭に位置していることも、排列上の偶然ではあろうけれども、家持の青春第一作たるにふさわしい。

「なでしこ」は家持が生涯通して愛した花であつたらしい。万葉集中「なでしこ」は二十六首、二十八例詠まれてゐるが、そのうち家持は十一首、十二例詠んでおり、家持に贈ったものの三首、家持も列席していた宴で詠まれたものの六首で、家持に全く無関係なものはわずか六首、七例である。^(注2)また彼の青春時代の相聞歌において、彼が本当に愛したと思われる三人の女性——坂上大嬢、みどり子を残して「亡りし妾」、紀女郎——に關しての歌にのみ「なでし

こ」を詠み込んでいることから、彼が「なでしこ」を特に愛すべき花としていたことを知ることができよう。^(注3)

第三、四句「いっしかも花に咲きなむ」は、旧訓サカナム（但し細井本及び温故堂本はサキナム）であったが、「代匠記精撰本」に「咲奈武ハ六帖ニモサカナムトアレド、願フ詞ナレバイツカト云ニカケアヒカタキ歟。サキナムト点シ換ベキニヤ。」と言ひ、「古義」において詳しい説明と共にサキナムと訓むべきことを主張してより、以後サキナムと改められた。「いっになったら花と咲くであろうか」という意である。

第五句は独立句である。「なそへつつ見む」とはいかなる意であろうか。何をしつつ何を見ようと言うのであろうか。諸注の主なものを列記すると次の通りである。（『内は口訳。圈点は筆者』）

「管見」　なすらへて見むトナリ。

「代匠記初稿本」　なでしこのうるはしきを、坂上大嬢になすらへてみむとなり。

「同精撰本」　ナゾラヘツ、見ムト云ナリ。

「考」　こは家持卿の妻のいと稚を撫子にたとへ、花に咲てひとならは母大嬢になそらへ見んとよめるなり。

「略解」　瞿麦の花咲かば、妹になぞらへ見むとなり。

「古義」　大嬢になぞらへつつ見む、となり。

「井上氏新考」　ナゾへはヨソへなり。四五の間にサキナバ妹ニといふことを補ひて聞くべし。

「全釈」　『アナタニナゾラヘテ、アナタト思ツテ見テ思ヒヲ慰メマセウ』

「総釈（藤森朋夫氏）」　『花が咲けば、なつかしいあなたに擬して、なぐさめながら見ませう』

「窪田氏評釈」　『咲いたらば妹に擬へて見よう』（擬して）

「私注」 『君になぞらへて見よう』

「全註釈」 『その花に寄せて見ましように』 (擬する意)

「岩波大系」 『美しいあなたに見立てて、眺めたいものだ』 (見なして。AでないBを、Aであると見立てて。)

「沢瀉博士注釈」 『咲いたならその花をあなたになぞらへて見ように』 (擬する。花をあなただと思って見よう。)

すなわち諸注は「なぞへつつ」を次のように解した。

なぞらへて 管見、代匠記(初)

なぞらへて 代匠記(精)、考、略解、古義、全釈、評釈、私注、注釈
(なぞらへて)

よそへて 新考

擬して 総釈、(評釈、全註釈、注釈)

寄せて 全註釈

見立てて 大系
(見なして)

そして「寄せて」とする「全註釈」以外は一致して、

なでしこを 大嬢に なぞらへて見よう

と説いている(管見、代精の二書は明記せず)。それに対して「全註釈」は、

なでしこに。寄せて見よう

と説いている。

「寄せる」場合は「大嬢をなでしこに寄せて見る」のが自然であろう。目の前にあるものに、容易には見得ぬものを「寄せて見る」のである。「なぞらえる」場合は「なでしこを大嬢になぞらえて見る」ことも「大嬢をなでしこになぞらえて見る」こともできるだろう。どちらをとっても意味するところは結局同じである。しかし諸注がすべて前者を採ったのは、「なでしこ」と「大嬢」とがあってそれを互いに「なぞらえる」時、無意識のうちに「なぞらえる」なら物を人に擬する、すなわち擬人化が当然という意識が働いたのではないだろうか。家持が「なそへつつ見む」と詠んだ心も、それと同じであつただろうか。私の答は否である。意味するところは窮極的には同じであるが、その心が、発想が違っていると、私は思う。

「なそへ」は万葉集に全部で五例しかない。記紀歌謡には一例もない。集中の例は次の通りである。

久方 天光月 隠去 何名副 妹惚 (卷十一・二四六三)

保等登芸須 許欲奈枳和多礼 登毛之備乎 都久欲爾奈蘇倍 曾能可氣母見牟 (卷十八・四〇五四)

秋等伊閑婆 許己呂曾伊多伎 宇多互家爾 花仁奈蘇倍 見麻久保里香聞 (卷二十・四三〇七)

宇流波之美 安我毛布伎美波 奈弓之故我 波奈爾奈蘇倍 美礼杼安可奴香母 (卷二十・四四五二)

第一例「ひさかたの」の歌は、卷十一前半を占める「以前一百四十九首柿本朝臣人麿之歌集出」の左注でまとめられた中の一首である。続く三例はすべて家持の歌で、「ほととぎす」は天平二十年(七四八年)三月二十六日の越中での作、「秋と言へば」は天平勝宝六年(七五四年)七月作の「七夕歌八首」の中の一、「うるはしみ」は天平勝

室七年五月十八日の橘諸兄の宴の後「追ひて作れ」る歌である。

「なそへ」の例は、柿本人麿歌集に一、家持に四ということになる。人麿時代、いわゆる万葉第二期に一例見るのみで、続く赤人・憶良・旅人らの第三期に見られず、また家持の時代すなわち第四期にも家持以外にこの語を用いた者が一人もないことは、この語の特殊性を考えていいのではないか。今われわれが「なぞらう」という語に与えている意味よりも、あるいはもっと狭い限られた範囲で、家持は「なそへ」の語を扱っていたに違いないと思うのである。

柿本人麿歌集出の歌(二四六三)は、「なそへ」を歌に詠み用いた最初の例と言えよう。この歌について、「考」は「月は妹がかほともなぞへ見るものなればいふ」と言い、「略解」も「月を妹が面になぞへ見るなり」と言ったのに対して、「古義」は「歌の意は、てる月の光を、見愛つゝ居ると人には云て、実は妹が怨しく思はるゝに堪かねて、外に出て居しに、やう／＼その月も、西の山の端に隠れはてぬれば、今は何を見つゝ賞美して、内へもいらずに居ると、人に、なぞらへことよせていはむぞ、となり」と解した。これに対して「井上氏新考」は「古義の釈はいたく誤れり」と断じ、更に「総釈(春日政治博士)」は「なぞへては後世のなぞらへてである。たぐへともいふ。又寄せてとか託してとかいふ意にもなる。この意味から、古義は…(中略)…即ちなぞへてはかこつけてといふ義に解してゐる。なぞへての寄せてとか託してとかいふ義はさうではない。其の物を媒介として聯想する義であつて、決して口実にしてとか、かこつけてとかいふ意ではない。この歌は月その物を妹として考へるのではなくて、自分が月を見ることによって妹も定めしこの月を見てゐるであらうなと思ふのが、月になぞへて妹をしぬぶのである。」と、「古義」の誤りを指摘し、独自の説を出した。しかしこれもまた「なそへ」の意を誤解している。以後の家持の四例

を見ても明らかなように、「なそへ」はあくまでその対象物に直接あるもののイメージをくつつけるのであって、「其の物を媒介として聯想する」というのは正しいが、「妹も定めしこの月を見てゐるであらうなと思」って妹を偲ぶという解釈は「吾が屋外に蒔きしなでしこ」の場合には成り立たない。

また「全釈」は「今迄は月を、愛する女と思つて眺めてゐたが、空を照す月も隠れたならば、これからは、何になぞらへて女を思ひ出さう。何もなぞらへるものがない。」と解釈しており、これが現代的には正しい解釈だとして通っているようである。しかし「何になぞらへて女を思ひ出さう」というのは「何になそへて妹を偲はむ」の心を正しく言い得ていない。

作者（人麻呂であろうか）は月を眺めて愛する女を思ひ出してゐるのではない。鴻巣盛広氏自身言っているように「愛する女と思つて眺め」るのである。その「思つて眺める」のも理性的に判断し、そして客観的に眺めるのではない。月が彼女か、彼女が月か、作者にはもうわからなくなっているのである。

人麻呂の、近江の天津の宮の廃墟に立つて、いにしえを偲んで詠んだ長歌（巻一・二九）の反歌

ささなみの志賀の辛崎幸くあれど大宮人の船待ちかねつ（巻一・三〇）

ささなみの志賀の大わだ淀むとも昔の人にまたも逢はめやも（同・三一）

について五味智英先生は「二首ともに自然を擬人した言ひ方であるが、擬人法の厭味を微塵も持つて居ない。これは作者が物を人に擬して居るのではなく、物と一体になつて居るからである。この物我一如の境地は人麻呂の一つの特徴である」と述べておられる。^{（注5）}「なそへて」はその境地である。

冒頭の家持歌（一四四八）がこの人麿歌集の歌（二四六三）の「何になそへて」を学んだのであらうということ

は、他に「なそへ」の例が全くないことと、家持の歌に卷十一の類歌が多いことから明らかである。

家持の「なそへつつ見む」の句が、「何になそへて妹を偲はむ」を受けて生まれたとすれば、「なそへつつ見む」はまさしく「なでしこの花になそへて妹を偲はむ」の心であることが理解されよう。

二

記紀歌謡・万葉集を通して、人麿歌集に一、家持に四、合計五例しか見えぬ「なそふ」について、「時代別国語大辞典（上代編）」には古事記上巻の「何吾比ニ穢死人」の「比」を「ナソフル」と訓んで用例としてあげている。

この訓は「古事記伝」の訓であって、新訓は、次田潤博士は「ナソフル」^(注6)、武田祐吉博士は「ソフル」^(注7)、倉野憲司博士は「クラブル」^(注8)、神田秀夫氏は「ナゾラフル」^(注9)としている。本居宣長は、万葉集に「なそへ」の例があることに

よって、この訓を得たのであった。今「類聚名義抄」に「比」の訓を求むれば、文意に合いそうなものは「ナラブ、タトフ、マシフ」の三つである。また、日本書紀に「比」を動詞として用いた次の四例がある。

弟姫、容姿絶妙無レ比（允恭）

聞レ之歆喜、無ニ能比者ニ（欽明）

愛寵之情、不レ可レ為レ比（舒明）

此之一言、竊比ニ於往昔之善言一矣（天智）

これらは、古典大系本の新訓ではそれぞれ、「ならびなし」「たぐひなし」「たぐひをすべからず」「たぐへむ」

と訓んでいる。先の古事記の場合も「なそふ」の用例とはなしがたい。

「類聚名義抄」には擬する意の「なそふ」の訓はない。索引によって

磕（磕） ……ナソフ

を得たが、この字は「新撰字鏡」には「止る呂久、奈留、比る佐久、波多女久」とあり、「名義抄」の訓も「ナソフ」の他は「ハタメク、ト、メク、カマヒスシ、テル、ナス」とあって、「ナス」は「鳴ス」であろうから「ナソフ」もそれに類する語で、擬する意ではない。

家持の歌の中に生きた「なそふ」は、彼の時代においてさえ他に類例を見ない如く、中古においては一般には全く用いられなかったようである。「伊呂波字類抄」にもない。「和訓類林」にもない。

伊勢物語に次の歌がある。

あふな／思ひはすべしなぞへなく高き卑しき苦しかりけり（大系本九十三段）

大系本頭注に「『それによそえて考えて見ることもなく―貴賤の身分の相違も考えずに』の意か。」とある。奈良時代に既に実用の語でなかったのではないかと考えられる「なそふ」が、「なぞへなし」という形容詞として、わずかにその露頭を見せているのである。

「雅言集覧」によれば、夫木和歌抄卷三に次の歌があるという。

ともし火を月になぞへてはるの夜のやみにも見ゆるやどの梅が枝（藤原行家）

この歌は明らかに家持の「ともしびを月夜になそへその影も見む」（四〇五四）を本歌としたものである。これをもって「なそふ」が生きていた証とはなしがたい。

また「国語大辞典」（平凡社）の用例を借用させていただけば、「天文十一年太神宮法樂千首」に次の歌があるという。

なぞへなき梢つづきの松がえにめぐれる藤の色をそふらん

前掲伊勢物語にあった「なぞへなし」とは約六百年の隔たりがあり、両者に直接のつながりは考えられない。この歌では「たぐひなし」と同じ意で用いられている。万葉集の「なそふ」には無かった意味である。埋もれていた語が数百年の時の流れののちにひょっこり顔を出した時、中古以後「なそふ」に代わって用いられた語の意味用法の変遷の中のその時点の意味が、おのずからその語に与えられたのであろう。

近世歌謡集「松の葉」第二巻の「手枕」に次のような歌詞がある。

ものを数々思ふ身を、誰か哀れと思ひはやらで、ゆかしき身こそ松の緑よ、いつも心をなぞえたや、千とせをも又かけてへ、千歳をかけて、やつさ変らぬ仲とよ、のうさてな。

「松の緑にいつも心をなぞえたい。千歳をかけて変わらぬ仲と」というのである。常に変わらぬ松の緑に、末永く変わらぬ心をかけて、その変わらぬことを願うのであろう。近世の庶民の素朴なまじないであったと思われる。

性急に「なそふ」を追って来た足跡は、道と言えるものを残すことができなかった。また時を得たならば、八重むぐらの生い茂る中に道を求めて、探り直してみなければなるまい。

「なそふ」は万葉時代にも、いかにも細々と生きて来た。つまり家持によってやっと命をつないでもらって来た。だから万葉時代の終焉と共に、いつか消えてしまったのである。しかし「逆ふ」から「さからふ」の語形が生じた如く、「なそふ」から「なそらふ」（↓なぞらふ↑なずらふ）が生まれたと考えられる。

「類聚名義抄」には次の通りである。

準・視・（倣）……ナゾラフ

倣・擬・待・則・擬・注・況・准・諷・藝……ナズラフ

（ナゾラフ・ナスラフとも、声点を有するものはすべて「ソ・ス」が濁音であることを示している）

また「伊呂波字類抄」も、「准・擬・況・視」などの字にナスラフの訓を記している。

しかしこの「なぞらふ・なずらふ」は、万葉集には一例もない。

三

古今集仮名序に「歌体六義」を述べるところがある。「詩経」の大序に詩を「風・賦・比・興・雅・頌」の六種に分類したのにならって、「そへうた・かぞへうた・なずらへうた・たとへうた・たゞごとうた・いはひうた」とした。このうち「そへ」「なずらへ」「たとへ」の三つは類似した概念を示すと思われる。従って互いに他の領域を侵し合い、その中で独自の意味を持つためには、自らの意味を狭く限定することになる。ここに、紀貫之の「なずらふ」という語の理解のしかたの一端を見ることができよう。

「歌体六義」の説明として付された例歌によって、古注に頼らず、右の三つについて考えてみよう。

「そへうた」の例歌は「おほさゝぎのみかどを、そへたてまつれるうた」として、

なにはづにさくやこのはな冬ごもりいまはるべとさくやこの花

とある。「そへうた」は、表面は花のことをうたっているように見せて、裏に作者の心を詠むなどの歌であるらしい。万葉集における「譬喩歌」のようなものを指している。^(註10)

「なずらへうた」の例歌は

きみにけさあしたの霜のおきていなばこひしきごとにきえやわたらん

とある。「なずらへうた」は、物によせて作者の思いを述べる、万葉集における「寄物陳思」歌のようなものを指している。^(註11)

「たとへうた」の例歌は

わがこひはよむともつきじありそうみのはまのまさごはよみつくすとも

とある。「たとへうた」は、作者が述べようとする事柄を他の物とくらべることによって強調し、印象を鮮明にせんとする歌である。「これは、よろづの草木鳥けだ物につけて、心をみする也」と記している古注は、これを譬喩歌と見ているのであって、「たとへ」の語義にとられた誤解である。

右の解釈が当たっているならば、ここに、「なずらふ」の本義は「くらべる」や「たとえる」でないということが示されている、と言えよう。前記三種の歌体の第二に「なずらへうた」の名称を用いた貫之の用語意識は、さすがに確かである。「なずらふ」は後になると、「くらべる」の意味が強く出てくるのである。

源氏物語に用例を求めてみよう。「源氏物語大成」の索引篇によれば「なずらふ」(「なぞらふ」はない)は、四段活用のもの九例、下二段活用のもの十七例、計二十六例ある。

(1) まろを、昔さまになずらへて、母君と思ひないたまへ(胡蝶)

(2) かの監が憂かりしさまには、なずらふべきけはひならねど(螢)

(3) かう、したたかにひきつくるひ給へる御ありさまに、なずらへても見え給はざりけり(行幸)

(4) 世の人に、なずらへ給ふこそ、中く、恥づかしけれ(夕霧)

(5) たゞ、かゝる心ざしを、深き淵になずらへ給ひて、捨てつる身と、おぼしなせ(夕霧)

(6) うしろやすき親に、なずらへて、ゆづり給へ(竹河)

(7) 明くる間咲きてとか、常なき世にもなずらふるが、心苦しきなめりかし(宿木)

(8) いみじう気色だつ色好みどもに、なずらふべくもあらず、おのづから、をかしうぞ見え給ひける(宿木)

下二段活用の語十七例中、右の八例は、源氏物語の用例の中で、万葉集に用いられた「なそふ」の語の概念に最も近い意識で用いられていると思われる。しかし人麻呂の歌に見られる「物我一如」の気分には程遠く、理の勝った気分が読みとられる。対象から一步離れた所に立つて客観的な目で「くらべて」見ているのである。中でも(2)と(8)は「くらべる」とほとんど同意である。

四段活用の次の四例は、その「並べて見て、くらべる」意が強く感じられる。

(9) たゞ今は、この内の大臣になずらふ人、なしかし(常夏)

(10) みかどの、赤色の御衣たてまつりて、うるはしう、動きなき御かたはら目に、なずらひ聞ゆべき人なし(行幸)

(11) いで、さりととも、かの院の、かばかりにおはせし御ありさまには、えなずらひ聞え給はざめり(若菜上)

(12) また、この御ありさまになずらふ人、世にありなむや(総角)

更に次の三例（四段活用）になると、「○○に」に当る語句は省略されてしまう。完全に「くらべる。比較する」の意として用いられている。

(13) 女みこたち二所、この御腹にましまして、なずらひ給ふべきだにぞ、なかりける（桐壺）

(14) おろかならぬ心ざしは、えしもなずらはざらむ、と思ふさへこそ、心苦しけれ（澤橋）

(15) まして、たゞ人は、なずらふべき事にもあらず（薄雲）

すなわち、(13)は、弘徽殿女御のお生みになった皇女たちでさえ、源氏の君の美しさに比較できる人はなかったのであり、(14)は、臘月夜への自分の並々なぬ情愛は比較にはならないだろう（たぐいまいほどだ）と思うのであり、(15)は、源氏の君が親王でありながらも母方の家柄が低いので一段差別されていることを述べた後、まして一般の臣下が源氏の君と比較できるわけがないと言うのである。

こうして「くらべる」意が強くなったからであろう、「擬する」意を強調して、「おなじく」とか「かはりに」とかいった連用修飾語を添える例が四例ある。

(16) さだすぎ人をも、おなじくなずらへ聞えて、いたく、な軽め給ひそ（若菜下）

(17) 今は猶、昔のかたみになずらへて、ものし給へなど、こまやかに書かせ給へり（桐壺）

(18) 思ひし物を、かの御かはりになずらへて、見るべかりけるをなど、ひき近し、心細し（総角）

(19) いにしへの御かはりと、なずらへ聞えて（早蕨）

理余って説明的になった。歌と物語文との違いはあるけれども、上代は遠くなりけり——と思う。

「かはりになずらふ」が「真似る」「模す」に至る。次の一例である。

(20) 式部のつかさのこゝろみの題をなずらへて御題賜ふ(少女)

最後に次の六例は、いわゆる「準じて」「ならって」の意である。

(21) 入道後の宮、御位をまたあらため給ふべきならねば、太上天皇になずらへて、御封賜はらせ給ひ(潯標)

(22) その秋、太上天皇になずらふる御位、得たまふて、御封くはり、官・かうぶりなど、みな、添ひ給ふ(藤裏葉)

(23) 良房の大臣ときこえける、いにしへの例になずらへて、白馬ひき、節会の日、内の儀式をうつして(少女)

(24) あり経れば、さのみやは。猶、世の人になずらふ御心づかひをし給ひて(橋姫)

(25) 右近の陣の御溝水のほとりになずらへて、西の渡殿の下より出づる汀ちかく、うづませ給へるを(梅枝)

(26) 上達部の祿など、大饗になずらへて、御子たちは、殊に女の装束、非参議の四位、まうちきんだちなど、たゞの殿上人には、白き細長一襲、腰差などまで、つぎ／＼に賜ふ(若菜上)

源氏物語には更に、名詞「なずらひ」一例、形容動詞「なずらひなり」六例、同「なぞらひなり」一例、「なし」を添えた形容詞「なずらひなし」一例がある。「なずらひなり」の用例からいくつか抜いてみよう。

(27) 慰むやと、さるべき人々を参らせ給へど、なずらひにおぼさるるだに、いとかたき世かなと、うとましようのみ、よろづにおぼしなりぬるに(桐壺)

(28) めでたしとは見れど、なずらひならぬ身のほどの、いみじうかひなければ(明石)

(29) この君たちをおきて外には、なずらひなるべき人を、求め出づべき世かはと、おぼし煩ふ(匂宮)

(30) 中の君をなむ、今すこし、世の聞え、かろ／＼しからぬ程に、なずらひならば、さもやと、おぼしける(竹

河)

(27)は、桐壺を失った悲しみを慰めようと、桐壺に似た人々を求め、せめて「なずらひに」思われる人でもと思うが、それもむずかしいというのである。大系本頭注には「せめて更衣に似た者として」とある。(28)と(30)は、「つり合うさま」を意味している。(29)の「なずらひなるべき人」とは、娘の婿にしようと思う人を指している。候補者である。「(婿)として考える」意であらう。

「なずらひなし」一例は、

その御子ども、さまざまあり給へど、この君に似る匂ひなく見ゆ。大宮の御心ざしも、なずらひなくおぼしたるを(少女)

とある。大宮が孫の夕霧を「なずらひなく」思うのであって、「くらべる」者のないほどかわいく思うのである。前掲の太神宮法樂千首の一首の「なぞへなき」が、「たぐひなし」の意で用いられたのは当然のことであった。

四

万葉集卷八の家持歌一四四八の「名蘇経」は、「校本万葉集」によれば、類聚古集・神田本(紀州本)・細井本に「ヨソへ」と訓じられている(細井本は、左にはナソへとある)。また、京都大学本は左に赅で「ヨソへ」とあると記されている。

卷十一の人麿歌集の歌二四六三の「何名副」は、「校本万葉集」底本(寛永本)および京都大学本・活字附訓本に

は「ナニノソヘテ」とあり、神田本「ナニナソヘテ」、温故堂本「ナニノナソヘテ」で、「なにになそへて」と訓じてあるのは西本願寺本・金沢文庫本・細井本・大矢本である。そして嘉暦伝承本と類聚古集の二本は「なにゝよそへて」と訓じていることが知られている。

二四六三の「ヨソヘ」と訓じた二本は、いずれも次点本である。他はすべて仙覚本系の写本および版本である。一四四八の「ヨソヘ」と訓じた三本のうち、類聚古集は右の通り次点本である。紀州本（「校本」では神田本）の巻十までの十冊は鎌倉時代の書写に係るもの（巻十一以下は室町時代に写して補なわれたものらしい）で、本文は古い伝本の面影を持つており、元暦校本や古葉略類聚鈔などと時に一致するところがある。訓は仙覚の系統を受けた点があるが、これは仙覚本を校本として受け入れたと考えられ、全体としてはやはりこのように古い訓を伝えているのである。紀州本巻十までは、次点本に属するらしい。細井本の訓が「ヨソヘ」となった理由は分らない。神宮文庫本の一伝本というから、仙覚寛元本が当初「ヨソヘ」であり、文永本において「ナソヘ」に改めたのかも知れない。細井本の疑問はあるが、両歌とも「ヨソヘ」の訓が仙覚以前のものです、仙覚が「ナソヘ」に改訓したと言つてよいだろう。古今六帖には家持歌一四四八に該当する歌が次のように記されている。

我宿に咲きしなてしこいつしかも花にさかなむよそへつつ見む

やかもち

古点が「ヨソヘ」であつたとみられる。

また、後撰和歌集卷四夏に次の歌がある（承保三年奥書本）。

わかやとのかきねにうへしなてしこはなにさかなんよそへつつみむ

平安時代から鎌倉時代中期、仙覚がナソへと改めるまで、「名蘇経」「名副」が「名」の字があるにもかかわら

ず、強引にも「ヨソフ」と訓まれていたのである。

「古義」にも引用されているように、源氏物語紅葉賀の巻に

よそへつつ見るに心はなぐさまで露けさまるなでしこの花

の歌がある。これも家持歌一四四八をふまえていると思われる。万葉集の「なそふ」は、中古においては「よそふ」という語で表わされていたのではないか。

「よそふ」が「ヨシ（寄）＋ソフ（添）」であることが、古くから指摘されている。今、この説に従って考えてみるに、「なそふ」も「ナシ＋ソフ」であろうと考えられる。^(注13)

ここに相異なる二つのものがあるとする。「寄す」はその二つを近づけることである。それはついには接し、あるいは重なり合うこともあるかも知れない。しかしあくまで二つのものは二つのものであって、決して一つにはならない。それに対して「なす」は、二つのものを一つにしてしまうのである。一体化するのである。前者が面をかぶって表面をだますのであるとすれば、後者は昔の狐や狸のようにばけるのである。

巻七「雑歌」の一二七〇の題詞として「寄_レ物発_レ思」とある。万葉集における「物に寄する」題の初出例である。

隠口乃^{こりぐちの} 泊瀬之山丹^{はつせのやまに} 照月者^{てるつきは} 盈_{みち} 具_{かけ} 爲_{して} 焉^{ひとのつねなき} 人之常無^{ひとのつねなき}（巻七・一二七〇）

泊瀬の山に照る月が満ち欠けするのを見て、人生の無常をまた改めて感じたのである。人の世の常無きことを月の姿の一日一日変化する常無きさまに寄せて、この一首をなしたのである。「物に寄す」とはかくの如きものをいう。

物不念^{ものしはず} 道行去毛^{みちゆくも} 青山乎^{あせやまを} 振放見者^{ふりさけみれば} 菌花^{つづしな} 香未通女^{にはなをとめ} 桜花^{さくらばな} 盛未通女^{さかえをとめ} 汝乎曾母^{なむそも} 吾丹依云^{わにやすとふ} 吾_わ 毛_も 曾_そ
な_に 依_よ 云_{とふ} 荒山毛^{あらやまも} 人師依者^{ひとしよすれば} 余所留跡序云^{よそとせいは} 汝心勤^{なれこころめ}（巻十三・三三〇五）

右の「汝をそも吾に寄すとふ 吾をもそ汝に寄すとふ」は、二人の男女を寄せて言うのである。次の東歌の例も同じである。

可都思加能 麻末能手兒奈乎 麻許登可聞 和礼爾余須等布 麻末乃亘胡奈乎（卷十四・三三八四）

あの名高い葛飾の真間の手兒奈を「吾に寄」せて人が言うのと、天にものぼる歓喜の心をうたっている。東国の若者たちの一度味わってみたいと等しく願っていた心をうたった民謡である。

「添ふ」は、「身副妹之」（卷十一・二六三七）、「於身副我妹」（卷十一・二六八三）、「身爾素布伊母乎」（卷十四・三四八五）、あるいは「於身副不寝者」（卷二・一九四）、「身二副殺儼牟」（卷二・二一七）とうたわれている。

また、次の一例がある。

棚霧合 雪毛零奴可 梅花 不開之代爾 曾倍而谷將見（卷八・一六四二）

卷八「冬雑歌」の一首「安倍朝臣奥道雪歌」と題詞にある。梅の花がまだ咲かない代わりに「そへてだに見む」とするのは、初二句から考えて「雪」を見ようというのである。雪を梅花の代用品として「そへて」見るといのであるから、この「そふ」は「擬する」意に解さざるを得ない。第四句「咲かぬが代に」は、前章において源氏物語の用例中「かはりになずらふ」とあった如く、「そふ」で「擬する」意を表わすに十分でないという意識があったことを示してはいないだろうか。この例は右の一首のみである。

「よそふ（寄）」は万葉集には次の三例しか見えない。

沫雪爾 所落開有 梅花 君之許遣者 与曾倍互牟可聞（卷八・一六四一）

梅花うめのか 先開枝さきひらき乎 手折てお而者 裏常名付うらとこなづ而 与副手よふで六香聞むく（卷十・二三二六）
 争者あらそひ 神毛かみ惡為にく 縦咲とほ八師やし 世副流よふる君之きみ 惡有にく莫君もく爾に（卷十一・二六五九）

三首とも「よそふ」の解釈に諸説あつて定め難い。第一、二例一六四一と二三二六が同趣の内容を詠んでいると指摘する諸注多く、両首はどちらも「冬雑歌」の部に収められており、「雪の梅の歌」および「花を詠む」歌として載せられている。またその構成の類似も、次の表で明らかであろう。

一六四一 梅の花（雪にふられて咲いた）を	君の許へ贈ったならば	ヨソヘテムカモ
二三二六 梅の花（一番に咲いた枝）を	手折ったならば	ツトと名付けて ヨソヘテムカモ

両首を恋人でなく友人に梅を贈るに添えた歌と解すること、両首の結句「よそへてむかも」を同意にとるべきこと、そしてそれを「この梅を私と思って偲んで下さるでしょうか」と解釈すべきことを主張する沢瀉博士「注釈」の説に従いたい。

「なそふ」の五例はすべて、自分の行為であつた。右の「よそふ」二例は、他人の行為を望むのである。「なそふ」ことを他に押しつけることはできなかったのではないか。

第三例二六五九の第四句「よそふる君が」は、「窪田氏評釈」に「我を妻に擬する君が」とあり、求婚された娘が相手の男をそう呼んだ風に解されている。武田祐吉博士は「全注釈」に、「よそふ」は「装ふ」と関係があるとして、「君が配偶者として装う意であらう」と述べ、「わたしに連れ添っている君が」と訳しておられる。その他の諸注は

「世間の人が私といい仲だとうわさをするあの方」という意に解している。この「よそふ」は二人が互いに身も心も「寄せ」ていることである。「なそふ」にはこの意はない。

「なす」についても一例をあげれば、次の如きものである。

白露乎しらつゆと 玉作有たまになしと 九月ながつ 在明之月夜あきあけのつゝよ 雖見不飽可聞みれどあかぬか（卷十・二二二九）

鳥音之とりがねの 所聞海爾かしろのうみに 高山麻たかやま 障所為而へだてになして 奥藻麻おくも 枕所為まくらになし 蛾葉之ひもじはの 衣谷不服爾きぬだにきず……（卷十三・三三三六）

第一例二二二九は、九月の有明の月に照らされて白露が玉と見まがうように美しいのを詠んだものである。玉のようだというより、玉そのものと見るのである。玉に変えてしまったのである。

第二例三三三六は、海辺に倒れ伏す人が高い山をへだてとし、沖の海藻を枕とし、蛾の羽ほどの衣さえも身にまとわずにいるのである。その人にとっては、高山はへだてそのものであり、沖つ藻は枕そのものとなっているのである。

「なそふ」の例歌をもう一度掲げよう。

人麿歌集

ひさかたの天照る月の隠れなば何になそへて妹を偲はむ（二四六三）

家持

わが屋前に蒔きし瞿麦いつしかも花に咲きなむなそへつつ見む（一四四八）
ほととぎす此よ鳴き渡れともしびを月夜になそへその影も見む（四〇五四）
秋と言へば心そいたさうたてけに花になそへて見まくほりかも（四三〇七）

うるはしみ吾がもふ君はなでしこが花になそへて見れど飽かぬかも（四四五一）

二四六三、照る月を妹だとして見ていた心には、その月を見失う悲しみは何ものにもかえられなかったであろう。

一四四八、家持の初作ではあるが、二四六三の心を体して、愛するなでしこの花においては可憐な坂上大嬢を見るものはないという気持で、この歌を詠んだのであろう。

四〇五四、これは宴歌である。越中掾久米広縄の館で賓客田辺福麿を饗した宴であった。福麿が「ほととぎす今鳴かずして明日越えむ山に鳴くとも驗あらめやも」（四〇五二）と、今宵のうれしい宴に興を添えに來ないほととぎすをなじったのを受けて詠んだ。時は三月二十六日、宵闇である。しかし明々とともる宴席のともしびの光は庭までも明るく照らし、月夜かと錯覚を起こすほどだったに違いない。「全釈」は「月夜の代りに燈火を以てしようとする趣向は全く珍らしい」と言うが、それは囑目の景から導かれた趣向であつたと思う。そしてこの時「ともしびを月夜に」に続くことばは「なそへ」以外にないと思う。ここは「よそへ」では当たらない。この歌が作り出す世界で、一時的にともしびの光を月光に変えてしまうには「なそへ」でなくてはならないのである。

四三〇七、七夕歌、牽牛星の心になって詠んでいる。秋の気配を感じ、秋の声を聞くと、彦星は織姫を美しい秋の花に「なそへ」て、その花を見たいと思つて心を痛めるのである。それは「総釈」の「花のやうに思ふ^{（金注）}」のでもないけれど、「全註釈」の「花に比して見たく思う」のでもない。あくまで花そのものを見るのである。^{（金注）}

四四五一、左大臣橘諸兄への親愛の情を最上級に表現しようとした。天平勝宝七年（七五五年）は、次の年二月には諸兄は左大臣を致仕するのであるから、諸兄への政治的圧迫はいよいよ激しさを増していたのである。五月十八日の橘奈良麻呂の邸での諸兄の宴に家持が出席しなかったのは、諸兄の政敵藤原仲麻呂への何らかの政治的配慮があつ

てのことではないかと疑うことができると思う。五月九日に家持は自宅で大原今城らと酒宴を開いておりながら、十一日のやはり諸兄の宴にも、家持は出席していなかったかも知れないと、この宴での家持の歌が記載されていないことから推測するのである。そして十八日の宴も出席しなかった。更にその冬十一月二十八日の同じく諸兄の宴の歌にも、家持の歌がないのである。閑話休題、天平勝宝七年五月十八日、家持は人目につく宴席への参加は遠慮したが讃歌は後で届けた。この時の歌は二首であるが、両首ともなでしこに無理に賀意を託してこしらえたもので、平凡な作である。家持は、その席上詠まれたと万葉集に記されている唯一の歌、船王の「なでしこが花取り持ちてうつらうつら見まくの欲しき君にもあるかも」（四四四九）によって、「なでしこが花にな、そへて見」ることを思いついたのであろう。船王の歌の上三句が「見まく」にかかる序詞として「なでしこの花をはつきり見たいように」（君を見たい）と詠まれているのに対して、家持は「なでしこの花としていつまでも（君を見たい）」と言うのである。

（本学助教授）

注1 拙稿「大伴家持の青春——天平五年前後——」（『五味智英先生還暦記念上代文学論叢』所収）に述べた。

注2 同右。

注3 同右。

注4 原文は片仮名である。また原文に付された傍線と、括弧でくくられた語句を省いて記した。

注5 「古代和歌」（至文堂、日本文学教養講座）六八頁。

注6 「古事記新講」

注7 「古事記」（角川文庫）、「古事記、風土記」（日本古典鑑賞講座）。尾崎暢殃氏「古事記全講」も同じ。

注8 「古事記・祝詞」（日本古典文学大系）

注9 太田善麿氏と共著「古事記」（日本古典全書）

注10 西下経一博士校訂「古今和歌集」（日本古典全書）にも、「そへうた」は「譬喩歌のやうなもの」とある。

注11 同上書に、やはり同じ説明がある。

注12 紀州本については、佐々木信綱博士「紀州本万葉集解説」による。

注13 「古義」卷二十・四四五一の解説には「ナソへは並配^{ナミソヘ}の意なるべし、ヨソへは、依配^{ヨリソヘ}の意なるを合せ思ふべし」とある。

注14 豊田八千代氏は「早くあの花のやうにうつくしい女を見たいと思ふので」と訳している。

注15 日本古典文学大系「万葉集四」の頭注に「秋というので心が痛む。わが妹を、花に、いつも見たいと私が思ってたろうか。」（圈点は筆者）とあるのが適切な訳である。